

令和 3 年 6 月 28 日現在

機関番号：80101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23124

研究課題名（和文）地理情報システムを用いた、北海道に現存する船絵馬の保存と活用に向けた試み

研究課題名（英文）Attempt to Preserve and Utilize Funa-Ema in Hokkaido Using Geographic Information Systems

研究代表者

田中 祐未（Tanaka, Yumi）

北海道博物館・研究部・学芸員

研究者番号：60840212

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：北海道内各地の社寺には、近世以降さかんに奉納された、船を画題とする絵馬「船絵馬」が現存している。本研究では、地域を絞って絵馬所在調査を実施した。具体的には、絵馬1点1点について、調査写真、絵馬に記された情報（奉納者名や居住地、奉納年月日等）、寸法などをデータベース化した。データベースには位置情報を紐付け、地理情報システムを用いて可視化することにした。この方法により、地域による現存数の偏りや奉納年代等の偏りを、定量的に分析することが容易になる。併せて、過去の調査記録写真をデジタル化し、虫損等により現在では確認しえない情報を補完する資料とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

船絵馬には、奉納者名や奉納年月日が記されており、海運をとおした人や物の交流を知るための貴重な手がかりとなるが、北海道全域の船絵馬現存状況は明らかになっていない。代表者は、将来的に北海道全域の船絵馬の全体像を把握することを見据えながらも、本研究では対象地域を絞り、研究方法を検討する作業を行った。まず、先行調査記録をもとに再調査することで、絵馬研究における再調査の重要性を認識した。また、地図上で絵馬分布状況を可視化することは、研究者が分析を行ううえでも、成果を発信する際にも助けとなるが、今回、その方法を実践することによって、今後調査範囲を広げるうえでの土台をつくることができた。

研究成果の概要（英文）：In Hokkaido, "Funa-Ema" (votive picture with the theme of a ship), which have been dedicated to shrines and temples since the early modern period, are still in existence. In this study, we conducted several surveys of the location of votive pictures in a specific area. Specifically, for each votive picture, we recorded the survey photo, description (name and place of residence of the dedicator, date of dedication, etc.), and dimensions in a database. This database is linked to location information, and the distribution of votive pictures is visualized using geographic information systems. This method makes it easy to quantitatively analyze the bias in the number of existing votive pictures in different regions and the bias in the date of dedication. At the same time, we have digitized photographs of past surveys to supplement information that cannot be confirmed at present due to insect damage.

研究分野：美術史

キーワード：美術史 絵馬 船絵馬 文化財 経年変化 地理情報システム

1. 研究開始当初の背景

日本全国の神社や寺には、江戸時代以降に奉納された、船を画題とする絵馬「船絵馬」が現存している。船絵馬には、奉納者の名前や居住地、作者の落款などの情報が記載されており、海運をとおした人や物のつながりを知ることができるという点で、民俗学や歴史学など、複数の学問分野にとって有意義な資料となり得る。

北海道を対象地域とした船絵馬研究には、林昇太郎（研究代表者所属機関の前身・北海道開拓記念館元学芸員）による積丹半島周辺地域を対象とした調査報告（以下、「林調査報告」）等が挙げられるが、北海道全域を網羅した研究蓄積はない。そのうえ、林調査報告は主に1980～1990年代のものであり、すでに20年ほどの時が経過している。絵馬は、一般に、紙や板に描かれることが多く、虫損や絵具剥落等によって劣化しやすい文化財であることから、現在の状況は林調査時から変化していることが想定された。

以上のような認識から、研究代表者は、北海道内の船絵馬の現存状況を、上述した報告済みの地域も含めて調査対象とし、現状を記録する作業が必要と考えた。本研究事業期間では、その足がかりとして、まず地域を絞り、調査方法やデータの整理、成果発信などの活動を試行することにした。調査対象地域には、積丹半島周辺地域を選んだ。理由は、代表者が勤務する北海道博物館に、前述の林昇太郎ら、旧北海道開拓記念館職員が実施した絵馬調査の記録写真フィルム（以下、「記念館調査記録写真」）がまとめて保管されており、それらをデジタル化し、本事業期間内の再調査結果と比較することによって、絵馬の保存状況の変化等を確認したいと考えたからである。

また、本研究では、調査した情報の整理や分析の手段として、地理情報システムを用いることにした。調査結果に位置情報を紐付けることによって、現存数の地域的偏りを定量的に分析したり、可視化して成果報告したりすることに役立てられると期待したためである。

2. 研究の目的

本研究は、次の3点を目的とした。

- (1) 地理情報システムを用いて、先行研究をデジタルデータベース化する。
- (2) 現地調査を行い、先行研究から変化した部分を追加情報としてデータベースに加える。
- (3) 研究により得られた成果を、資料紹介や博物館における展示として発信する。

代表者は、長期的には、北海道全域にわたって絵馬の現存状況を把握したいと考えている。ただし、これらのことを北海道全域にわたって完了させるためには、2年間という研究期間では困難であるから、本研究事業期間では地域を絞ることにした。

3. 研究の方法

- (1) 過去の調査記録写真（フィルム・現像された写真）のデジタル化
記念館調査記録写真（フィルムおよび現像された写真）を、スキャナを用いてデジタルデータ化し、事業期間内に実施する現地調査の比較対象とする。
- (2) 現地調査（写真撮影・採寸・聞き取り）
林調査報告（「積丹半島に現存する絵馬について」『積丹半島の自然と歴史 一人文編一』北海道開拓記念館研究報告 第13号、1993年等）に照らしながら、寿都町、余市町、岩内町、寿都町などにおいて調査を実施する。
- (3) 調査結果のデータベース化
絵馬1点1点について、墨書（奉納者や奉納年月日等の記載事項）、寸法、写真等の情報を記録したデータベースを作成する。その際、地理情報システムを活用し、分析や成果報告に役立てることを試みる。

4. 研究成果

(1) 絵馬研究における再調査の意義

本研究では、主に林調査報告と記念館調査記録写真を参照しながら、寿都町、余市町、岩内町等で現地調査を行った。その結果、前回調査時とほぼ変わらない状態の絵馬が多く確認された一方で、絵の具の剥落や虫損が進み、墨書の一部が読み取れなくなった絵馬も複数確認された。この事実は、①過去の記録写真が、現在では確認し得ない情報を伝える貴重な史料であること ②未調査地域の現地調査を実施し、現状を記録することが喫緊の課題であることを示している。

一方で、今回の再調査によって、林調査報告には未掲載であった情報をいくつか補完することができた。林調査報告には、裏面の記載事項や、寸法情報などが未掲載の絵馬が複

数ある。今回の現地調査では、そのうち数点の絵馬について、新たに情報を取得することができた。また、聞き取り調査の中で、記念館調査の後に建て替えや合祀などが行われた神社の存在について教示を受けた。さらに、記念館調査記録写真と、本事業期間で新たに取得した調査記録写真を見比べると、建物が変わっていないにもかかわらず、新たな絵馬の奉納などが理由で、既存の絵馬の掲示位置が一部変更されていることなどが確認された。絵馬は、一般に、壁の高い位置、すなわち長押の上などに掲額されることが多い。天井に近い場所に掲額されている場合は、寸法を図ることが困難であったり、裏を確認することができなかつたりする。調査を通して、その時々状況によって、取得できる情報が変化することがわかった。

以上のように、絵馬を研究対象とする場合、すでに調査が行われた地域についても、一定期間経過後に、再調査を行う意義がいくつもあることを認識した。

(2) デジタルデータベースの作成

今回の研究事業期間中、新型コロナウイルス感染症が流行したため、当初計画していた地域すべてで現地調査を行うことは叶わなかった。しかし、寿都町において、現地の教育委員会や宮司、町民の協力のもと、神社8社と寿都町総合文化センターの計9件において、絵馬計140点という、まとまった数の絵馬調査を実現することができたため、当初の目的であった、「データベース作成」の試みを実践することができた。

具体的には、絵馬1点1点について、墨書（奉納者名、奉納者の居住地、奉納年月日、作者等の記載事項）、現地で撮影した写真、絵馬所在地の位置情報などの項目を一覧にしたExcelデータベースを作成した。このデータベースをアプリケーションソフト「QGIS」に読み込むことにより、地図上で、絵馬の分布状況を確認することができるようにした。さらに、絵馬データベース検索システムを委託制作した。本システムは、地図上で、寿都町内の絵馬の分布を閲覧できるだけでなく、画題等による絞り込み検索も可能な仕様とした。加えて、工夫した点として、本システムは、DVDをパソコンに読み込むだけで、地理情報システムのソフトを日常的に使っていない人でも、マウスによる地図の拡大縮小やキーワード検索等の直感的操作だけで絵馬の情報を閲覧できるようにした。これは、調査協力機関と情報交換を行い、互いの知見を交換することを見据えたものである。

地理情報システムを用いた船絵馬研究の展望として、調査範囲を北海道全域、さらには本州にも広げることによって、分布情報だけでなく、海運をとおした地域間のつながりを可視化したいと考えている。具体的な例を上げると、寿都町には、明治13（1880）年に、加賀国瀬越村の北前船関係者によって奉納された船絵馬がある。落款によれば、制作者は絵馬藤という人物で、大阪で活躍した絵馬師として著名である。作者、奉納者、奉納先の各地の関係性について、地図上で示すことができれば、海運をとおした人や物のつながりについて、研究者が分析を進めるうえでも、それによって得られた成果を発信する際にも、理解を深めやすくなることが期待される。

(3) 船絵馬の資料的価値の発信

研究計画当初は想定していなかった付随的成果として、船絵馬に関する先行研究を読み込むことにより、北海道博物館が所蔵する、激しく破損した船絵馬の資料的価値を認識することができた。先行研究によれば、船絵馬の制作方法は、嘉永年間ごろに変化したという。すなわち、船絵馬というジャンルが成立した当初は画面全体が肉筆で描かれていたが、大量生産を目的として船体部分のみ版画を貼り付ける方法が編み出され、次第にその方法が主流になったと指摘されている。

北海道博物館には、船体部分の紙が完全に剥がれてしまった船絵馬が収蔵されているが、これは、先行研究において指摘された、船体部分のみを版画化したという制作方法を物語る資料といえる。同じように、版画貼付部分が剥がれてしまったり、剥がれかけたりしている事例は、他府県の調査報告でも報告されているし、代表者が本事業機関を通して調査したなかでも、複数確認された。調査を進めるなかで、船絵馬が大切に保管され続けている様子を複数の社寺で確認した一方、劣化が進んだためにやむなく絵馬を処分したという話を聞くこともあった。

以上のような認識のもと、代表者は、船絵馬の普及活動の一貫として、北海道博物館のニューズレター「森のちゃれんがニュース」において、ほぼ完全な状態で残る船絵馬、破損した船絵馬、両方を対比させることによって、それぞれがもつ資料的価値について紹介した。また、同様の趣旨を、当館の総合展示室の期間限定展示「クローズアップ展示」において、実物を展示しながら解説した。多くの人に船絵馬の資料的価値を発信することによって、北海道内各地の船絵馬が、破損したものも含めて、保存が図られることを期待したものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

| | |
|---------------------------------------|------------------------|
| 1. 著者名 田中祐未 | 4. 巻 5 |
| 2. 論文標題 寿都町の絵馬 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 北海道博物館研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 p169-190 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|--|
| <p>・北海道博物館所蔵の船絵馬について、博物館発行の定期刊物「森のちゃれんがニュース」で取り上げた。状態が良好な船絵馬と、激しく破損した船絵馬の2点を紹介し、それぞれが持つ史料的価値について解説した。</p> <p>・研究代表者が所属する北海道博物館の展示コーナー「クローズアップ展示」において、2020年8月14日から10月15日の間、「船絵馬」をテーマとした展示を公開した。</p> |
|--|

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|